

松 山 大 学 論 集  
第 29 卷 第 3 号 抜 刷  
2 0 1 7 年 8 月 発 行

14 世紀初頭のある替銭文書  
— さいくわん替銭証文案 — について

井 上 正 夫

# 14 世紀初頭のある替銭文書 — さいくわん替銭証文案 — について

井 上 正 夫

## は じ め に

国立国会図書館所蔵「さいくわん替銭証文案」<sup>1)</sup> (以下, 「さいくわん文書」とする。) は, 鎌倉時代末期の替銭 (為替) に関わる史料である。ただし, 先行研究では, この史料をもとに当時の替銭のしくみを検証した業績は多くない<sup>2)</sup>。

本稿の目的は, さいくわん文書の再検証を通じて, 当時の替銭のしくみの一端を解明することである。

## 1 替銭のしくみと約束文書による払出の問題

### ① 原初的替銭と割符の並存

先行研究によれば<sup>3)</sup> 替銭とは, 2 地点間における反対方向の送金を行う上で, 文書を介在として現銭現送を伴わずに送金を可能にするもので, 振出された替銭文書は信頼関係のある者相互の間で授受され, 最終的には払出人のところに持参されて払出がなされることによって, 異なる 2 方向の送金が完結するしくみである。替銭は大きく分けて原初的替銭と割符<sup>4)</sup> のしくみがあり, 前者は 13 世紀半ばまでに<sup>5)</sup> 後者は 14 世紀初頭に成立したと考えられている<sup>6)</sup>。

原初的替銭のしくみを簡潔に述べれば, 甲地の A に対する乙地の B からの送金と, 甲地の C から乙地の D への送金が必要な場合に, A が B への払出委託文書 (以下, 「委託文書」とする。) を作成して振出し, その文書との引き換えに甲地で C から現銭を入手し, 一方, C は入手した委託文書を乙地の D に送付し

て、DがそれをBに持参して払出を受けるというものである（図1）。これによって、当初の反対方向の2つの送金が現銭現送を伴うことなく実行されるのである。ただし、原初的替銭においては、払出人Bとそこに委託文書を持参する持参人Dとの間には面識のあること—すなわち信頼関係の存在—が必須である<sup>7)</sup>。払出人Bにとっては見知らぬDの持参では、その文書の真贋の判断や持参人の正当性を確認することが困難だからである。

この原初的替銭のしくみの限界を克服したのが割符である。割符は、先と同様に説明するならば、甲地のEから乙地のFへの送金が必要な場合に、AとEとの信頼関係に基づき委託文書すなわち割符が振出されて、Aが甲地で資金を入手するのだが、委託文書の振出の際に、片方文書<sup>かたかた</sup><sup>8)</sup>との間に割印を施し、委託文書がA→E→F→Bという順で譲渡されBに持込まれる一方で、片方文書がAからBに持込まれて、2つの文書の割印の合致を確認して、Bが持参人Fに払出するというしくみである（図2）。この場合、甲地でのAとEには面識があるのに対して、乙地のFとBには必ずしも面識はない。それでも、片方文書がA自身（あるいはAの配下の運送人等で、Aの関係者であることをBが認める人物）によってBに持込まれることは、それに対応しAが真正を認める文書が世に存在することをBに理解させ、次に、見知らぬF持参の委託文書の割印と片方文書の割印とが合致することによって、持込まれた委託文書の真正をBは確信できるわけである<sup>9)</sup>。この割符のしくみの考案によって、Aは、それまでの内部的な関係者に限定されることなく、自らの力量によって新たな資金提供者を獲得することが可能になった。

結局、この新旧2種類の替銭は、中世を通じて並存した。こうして、見知らぬ持参者にさえ払出が可能な割符が出現したならば、面識のある持参人にしか払出ができない原初的替銭は、一見すると存在の意味がないように思われるかもしれない。しかし、原初的替銭には片方文書がなくても払出が可能というしくみの簡便性があり、また払出される銅銭の価値変動が深刻化した場合には、替銭の参画者の信頼関係に基いてお互いの損得を調整できる余地が残っている

図 1 原初的替銭のしくみ

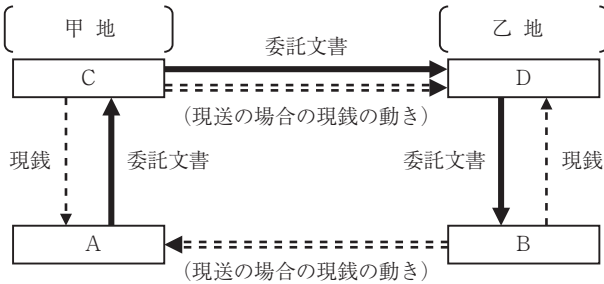


図 2 割符のしくみ（為替文言の割符）

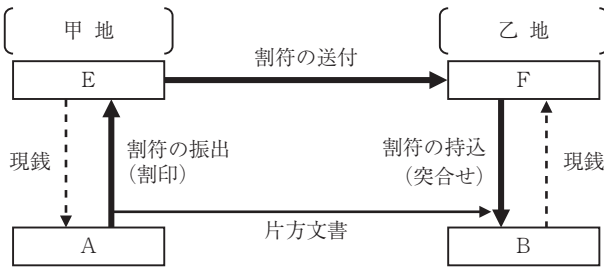
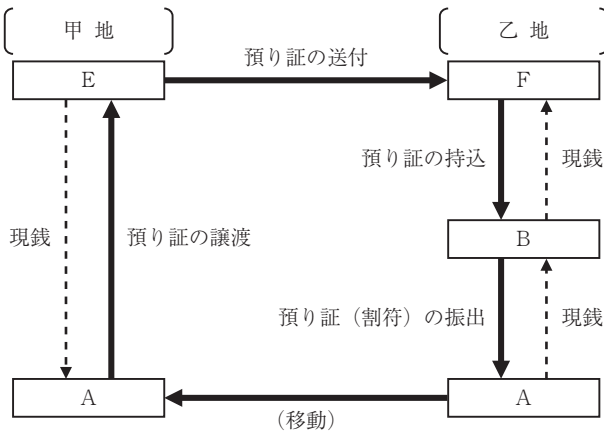


図 3 割符のしくみ（預り文言の割符）



という安定性もある<sup>10)</sup> 割符の利便性に対する原初的替銭の簡便性と安定性。この相互補完的優位性の存在が、中世日本における新旧2種類の替銭の並存理由である。

## ②替銭における委託文書と約束文書の並存の問題

中田薫氏は、近世の為替手形の研究の中で、為替手形の大部分を占める委託文書と並んで、約束文書が存在している理由を考察した<sup>11)</sup> 中田氏は、中世の替銭においても、委託文書と約束文書が並存していることに着目して、近世の為替文書の淵源が中世にあり、近世の為替のしくみにおける2種類の文書の並存理由は、中世からの連続性にあるとした<sup>12)</sup>

この中世から近世への連続性という仮説の当否を論じることは本稿の目的ではない。中世と近世とにおける共通の現象は、因果関係にあるかもしれないし、単に、人間の営みの中である程度普遍的に発生するものかもしれない。本稿で問題とすべきは、さいくわん文書が、委託文書か約束文書かという点につき。この確定なくしては、文書中の人物の役割や立場が定まらず、当然にして、さいくわん文書が示す替銭のしくみの復元も不可能である。

そこで、以下では、中田氏が約束文書と見なした中世の替銭文書から確認しておこう。

永仁元年（1293）12月2日付け「加治木頼平替銭請取状案」には、

（端裏書）「かへせにのうけふみのあん」

うけとるかへせにの事

あはせて五貫文者

右、くたんのかへせに、かまくらにて給候ぬ、かのせにのかはりハ、とう  
 しのしつそうしのたいふのいかうの御はうのもとより、五日かうちに、五  
 貫文をさたしまいらせられ候へく候、もしいかなる事も候て、やくそくの  
 日をもすき候は、一はいのさたをいたすへく候、よてのちのために、し

やうくたんのことし、

永仁元年十二月二日 (加治本頼平) (判)  
よりひら在一<sup>13)</sup>

とあり、宛名はないが、頼平は、鎌倉で5貫文を受領したこと、その代わりに京都の東寺で5貫文の払出がなされることを述べている。また、後半の文言は、東寺からの払出がない場合の保証を述べたものであり、全体としては、最初の受取文言といい、後半の保証文言といい、鎌倉で頼平に5貫文を支払った人に対する文言である。一方、中ほどの東寺が5貫文を払出すという文言は、東寺に対して払出を委託しているのではないし、東寺が払出を約束しているわけでもない。あくまで、東寺が払出すはずだということを、頼平が鎌倉での資金提供者に述べているだけである。それでも、もし東寺がこの文書の提示を受けて京都で5貫文の払出に応じれば、この文書は替銭を成立させる効果を持つ。実際、鎌倉時代には、受領書だけでも替銭の払出に応じた事例があり、替銭の参画者の間で事前の申合せさえあれば、受領書だけで替銭が成立している<sup>14)</sup>。結局、この文書も替銭を可能にさせるという意味では替銭文書であり、頼平が東寺に払出を委託したのと同じ効果を持つ。つまり、そのしくみは図1と同じなのである。中田氏による約束文書という表現は、払出人の立会はないものの、払出人が払出すだろうことを資金提供者に述べたという点を重視したのだろうが、本稿ではその「約束」という文言を踏襲して、この替銭文書を「約束文書」と表現する。

次に、約束文書のうち、振出人自身が乙地に移動して自ら払出に応じるといふ替銭を考えてみよう。中世の替銭文書でこの形式をとる史料は、いまのところ確認できていないけれど<sup>15)</sup>、中田氏の研究では、近世末期の事例が紹介されている<sup>16)</sup>。よって、本稿におけるさいくわん文書の解釈としては、そうした振出人自身が移動して他地にて自ら払出すことを約束している可能性も念頭に入れておく必要がある。

以上をまとめると、送金を可能にする替銭文書には、第1に委託文書、第2

に他地で別人が払出すことを述べる約束文書、そして、第3に、可能性は低い  
が、他地で振出人本人が払出すことを約する約束文書の3種類が存在するという  
ことになる。

## 2 約束文書としての解釈の妥当性の検証

### ①さいくわん文書の確認

まず、史料の内容を確認する。さいくわん文書には、

(端裏書)「<sup>(替 銭)</sup>かへせにの<sup>(宿)</sup>やとの<sup>(異 筆)</sup>し文「河北年貢」  
<sup>(京)</sup>きやうの<sup>(樋 口 町)</sup>やとハ、<sup>(尼)</sup>ひくちま<sup>(前)</sup>ちのひんかしすみ、ひくちおもてのみなみのつら  
にて、こわらあま御せん<sup>(京)</sup>と御たつね候て、いや五郎とのとおほせ候へく候、  
<sup>(備 後)</sup>ひんこの<sup>(河 北)</sup>国かわきたの<sup>(領 家)</sup>りやうけの御かへせにの事

合三十貫文者、

右、件の御かゑせにハ、たしかにうけとり候ぬ、但らい月五日六日ころ  
にハ、いそき―あけさせ給候へく候、もしなんこうに候ハハ、<sup>(難 行)</sup>きやう  
<sup>(傍 例)</sup>はうれいにめされ候へく候、<sup>(替 文)</sup>依かゑふみのしやう如<sup>(字)</sup>件、

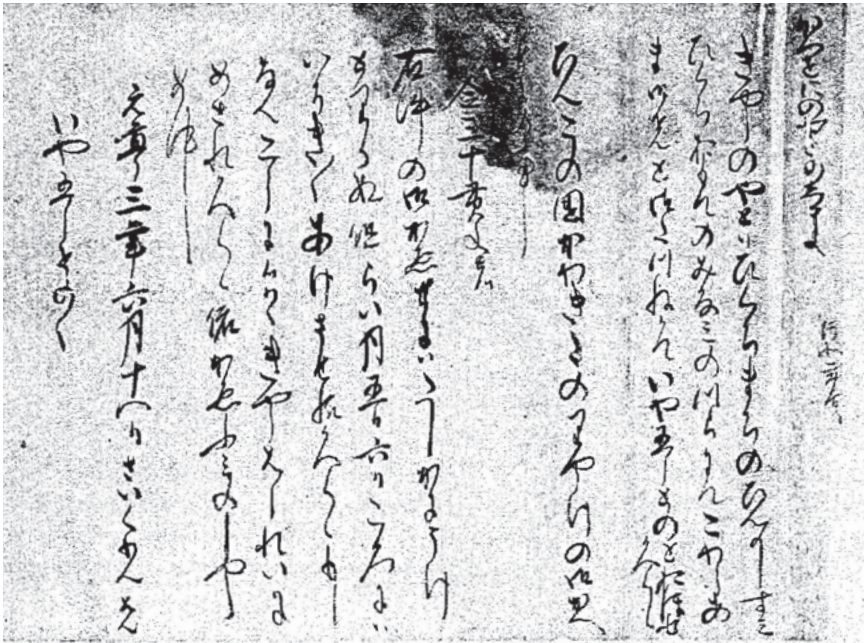
元享三年六月十八日                  さいくわん          はん

いや五郎とのへ<sup>17)</sup>

とあり、元享3年(1323)の史料である(写真1)。ただし、この史料は、替銭  
の払出で実際に使用された正文ではなく、案文である。替銭での払出を受ける  
前に作成された控えと考えられる。

なお、この文書はもともと京都の長福寺の所蔵であるが、先行研究によれ  
ば<sup>18)</sup>長福寺がこの時期に「備後国河北の領家」(ひんこの国かわきたのりやう  
け)であったわけではない。長福寺がこの文書を入手した理由は、寛正7年  
(1466)に貸付を行った際に担保物件の一部としてこの文書の譲渡を受けたか  
らである。元享3年(1323)時点における史料中の「領家」は、京都の浄蓮花

(写真1) さいくわん替銭証文案 (さいくわん文書)



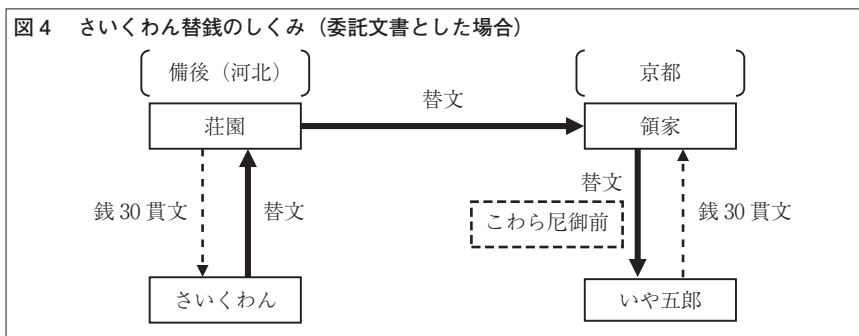
『国立国会図書館ウェブサイト』より転載

院あるいは三鈷寺とされているが、以下では、単に京都方面の領家としてののみ検証を進める。

さて、さいくわん文書の後半部分、すなわち「ひんこの国」以下は、「さいくわん」から「いや五郎」に対して、「替銭 30 貫文を受け取ったので、来月の 5 日か 6 日頃にはお渡してください、もし難しいようでしたら、京都の傍例で処理されますように。」という内容であろう。普通に考えれば、さいくわんが備後国で年貢の 30 貫文を受取ったので、それに対応する払出を、京都のいや五郎に委託した(図4)と読むのが、自然である。

一方、前半部分は追記である。あるいは、もともと別紙であったものを、控え作成の際に関連文書として一紙に書き写したかである。いずれにせよ、内容

図4 さいくわん替銭のしくみ（委託文書とした場合）



は、この替銭文書の持参人が京都で払出人を訪ねるための案内である。その細かな説明から見て、持参人は樋口町の宿のことも知らないし、こわら尼御前との間に面識はない。

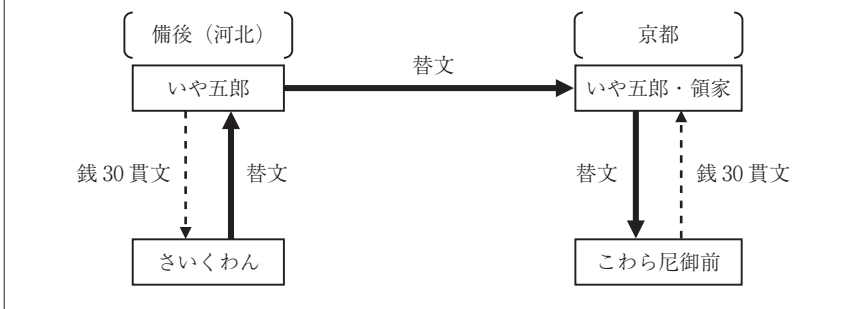
## ②約束文書である可能性の検証

中世の替銭文書には、委託文書と並んで約束文書が存在した以上、このさいくわん文書も約束文書である可能性を検討しておかなければならない。

以下では、まず、先述の第2の場合、すなわち別人による払出を予定した約束文書である可能性から検討しよう。ただし、この場合には、後半の替銭文書の本文部分には、払出人の名前が出てこないことになり、先の「加治木頼平替銭請取状案」が払出人を明記していたのに対して、替銭が成立する上で払出人が誰かという重要な情報が欠落していることになってしまう。よって、この段階で、替銭文書として解釈するのは困難としなければならない。しかし、なお、この文書が約束文書として成立する余地があるか否かを検討しておこう。

まず、これをいや五郎に対する払出の約束文書とし、いや五郎自身が京都の樋口町の宿に赴き、こわら尼御前から払出を受けると仮定しよう（図5）<sup>19)</sup> この仮定のもとで解釈していくならば、樋口町に着きたいいや五郎は、そこで自分のことを「いや五郎との」と名乗るように指示されていることになり、不自然

図5 約束文書とした場合（こわら尼御前による払出）



である。そもそも、いや五郎自身が樋口町に到着して払出を受けるのに、名乗ることは指示がなくとも当然で、いちいち追記で指示すること自体が余計である。ようするに、いや五郎を持参人とする仮定では、約束文書としての解釈は成立しえないことになる。

次に、現地でさいくわんに 30 貫文を渡したいや五郎は京都に行かずに、替銭文書だけを領家に送付し、領家の使者がこれを樋口町に持参して、使者に払出がなされることを、さいくわんが約束した（図5）と仮定するなら、解釈が成立するだろうか。これならば、追記の部分は、領家の使者が、案内通りに樋口町の宿を訪ねた際に、「いや五郎殿からの替銭だ」という意味で、「いや五郎との」と述べるように指示されたと解釈でき、少なくとも、先述のように、いや五郎本人に「いや五郎との」と名乗らせる指示になってしまう不自然さはなくなる。この場合も、払出人は、先と同様に、こわら尼御前である。

しかし、そうであっても、使者がこわら尼御前に対して「いや五郎との」と述べるようにと指示されたところで、そこには何か合理的な理由が見出せるだろうか。本来ならば、文書の作成者ががさいくわんである以上、払出人のこわら尼御前からすれば、樋口町での見知らぬ使者に対する払出を、なかば勝手に約束しているさいくわんの方が、重要な関係人であり、使者とさいくわんとの関係こそが気になるはずである。替銭文書を見れば誰もが知りえるいや五郎の

名前を持出されても、意味がない。

考えられるとすれば、こわら尼御前が特別にいや五郎との関係で払出すことを業務としており、いや五郎の名前を持出すことによって、使者とこわら尼御前との間の信頼関係欠如を補完しようとした可能性である。使者がいや五郎の名前を持出すことによって、こわら尼御前は使者に対して多少の信頼を寄せることができるかもしれない。

しかし、この言葉に信頼を寄せるのは、すこぶる危険でもある。特に、こわら尼御前がさいくわんを知らない場合には、信頼関係のないさいくわんの振出した為替文書にいや五郎の名前があり、見知らぬ使者がいや五郎のことを語るだけで、払出に应じてしまうのでは、いや五郎の名前を利用した詐欺の格好の餌食である。

たとえ、こわら尼御前がさいくわんと間に信頼関係があり、かつ、いや五郎のために払出の業務をしている存在だと仮定しても、いや五郎の名前を持出されただけでは、次にあげる2つの理由から払出上の同様の危険は排除できない。

第1の理由は、為替文書がいや五郎宛であることが明記されている以上、いや五郎のことを述べる程度のことは、文書さえ見れば盗人等どんな持参人にも可能なことで、そのため持参人の真正を判断する材料にならないからである。

第2の理由は、こわら尼御前にとって、文書が偽造だという可能性を疑うならば、見知らぬ人がいや五郎の名前を語ったところで、文書の真正の確信は得られないからである。

このことは、この替銭の参画者である荘園や領家も理解し不安に感じることである。そうなると、結局、替銭の取組は当初から成立しないことになる。ようするに、こわら尼御前とさいくわんと間の信頼関係の有無にかかわらず、さいくわんが使者はこわら尼御前に対して「いや五郎との」と述べるように指示することには、合理的理由が見出せないのである。

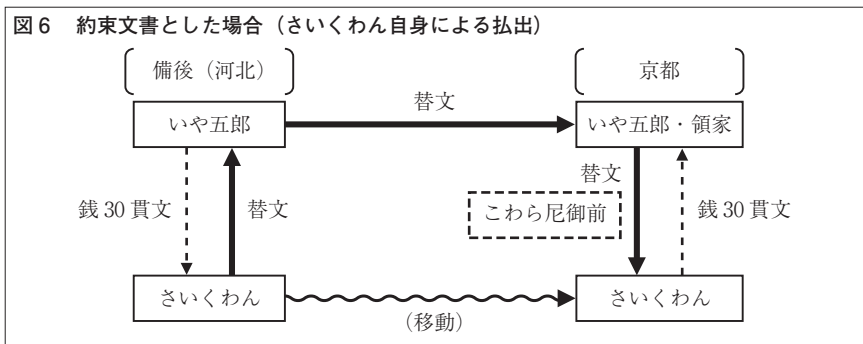
以上により、さいくわん文書は、京都でこわら尼御前が払出すことを述べた

約束文書，すなわち先の第2の形式である他地で別人が払出すことを述べる約束文書としては整合的に解釈ができないことになる。

それならば，先の第3の形式，すなわち振出人本人が京都で払出す約束文書として解釈することは可能だろうか。つまり，払出人となるのはさいくわん自身で，こわら尼御前は受付である(図6)。この場合も，持参人はいや五郎か，領家の使者である。

しかし，持参人がいずれにせよ，さいくわん自身が払出を約束しているという仮定では，本文部分の「あけさせ給候へく候」との整合性が保てない。自分が払出す行為を尊敬語で表現するのは不自然だからである。

結論として，さいくわん文書は他者払出の約束文書としても，振出人本人による払出の約束文書としても，解釈上の整合性を保てないことが明らかになった。故に，さいくわん文書は約束文書ではない。



### 3 不完全な原初的替銭を補完する試み－暗証的機能－

#### ① 委託文書としての解釈と問題点

それならば，さいくわん文書は，委託文書としてならば整合的に解釈が可能であろうか。委託文書として読むならば，振出人さいくわんは，備後国かその

周辺で荘園から領家への年貢を受領し、その代わりにこの文書を振出して、京都のいや五郎に払出を委託したのであり、この文書を持参する領家の使者は樋口町の宿を知らないで、追記部分の案内により、こわら尼御前を訪ねて、「いや五郎との」への取次を依頼するのである（図4）。さいくわんは、いや五郎に30貫文を「あげさせ給候へく候」つまり払出していただきますようお願いする。しかし、移動時間も含めれば、来月の5日や6日というのが、（急かもしれないので）難しい場合には、京都での取扱事例に沿って処理してください、というのが大意であろう。

この解釈は、先の約束文書として解釈するよりもはるかに自然である。ただし、委託文書として考えた場合にも、原初的替銭のしくみとの関係では、以下の4つの点で問題が生じる。

第1には、30貫文もの払出に応じることができるいや五郎のことならば、「ひくちまちのおもてのみなみのつら」までたどり着けば、探し出せそうなので、わざわざこわら尼御前を経由する必要はない点。

第2には、領家の使者は、払出される宿の場所を知らないし、こわら尼御前のことも知らないはずなのに、替銭文書の持参人と払出人との間の信頼関係の存在を必須とするはずの原初的替銭がなぜ利用可能なのかという点。あるいは、領家の使者はいや五郎のことだけは知っており、いや五郎さえ探し出せば信頼関係の連鎖は回復し確保されるという可能性も考えられなくはないが、やはり使者はいや五郎とは面識がないからこそ、宿までのくわしい説明が必要なのである。よって、使者と払出人たるいや五郎の間では信頼関係はないはずである。

第3には、もし原初的替銭として解釈できないならば、実は、さいくわん文書自体を、持参人と払出人との間に面識がなくとも利用可能な割符として読み直す可能性を疑わなければならない点。これに関しては、さいくわん文書の写真（写真1）では、割印を示すような痕跡はないが、この文書自体が写しであるから、割印部分は省略された可能性を考えるならば、写しの文書に割印がな

いからといって割符ではないとも断定できない。しかし、さいくわん自身がこの文書を「替文」と述べて、割符だとは述べていないことから見れば、やはりこの文書は割符ではなさそうである。

第4には、すでにこの時期には割符が登場しているのに、何故さいくわんは、この不完全な原初的替銭のしくみをあえて利用するのかという点。利便性の高い割符を利用すれば、見知らぬ使者にもいや五郎は安全な払出が可能なのに、さいくわんは割符を知らなかったのだろうか。

## ②一見無意味なこわら尼御前の存在の意味

さいくわん文書を解釈しようとした場合、いや五郎と使者との間の信頼関係の有無にかかわらず、使者がいや五郎のところにたどり着くためだけならば、こわら尼御前の存在は明らかに無意味である。追記の細かな案内によって、使者はいや五郎が払出をする宿にはたどり着けるからである。それならば、使者が先にこわら尼御前を訪ねるよう指示されているのはなぜか。

この第1の問題点への解答は、実は、第2から第4までの問題点との整合性を探ることによって導出可能と考えられる。すなわち、この原初的替銭での信用の連鎖は途切れて本来成立しないはずなのに（第2）、割符ではなく原初的替銭の文書によって（第3）、あえて原初的替銭が取組まれた（第4）のは、一見無意味なこわら尼御前を利用する手法が（第1）がすべての問題を解決するからである。

その手法とは、さいくわんはいや五郎との間で、いや五郎の見知らぬ持参人への払出を委託する場合には、直接いや五郎を訪ねるのではなく、持参人にはいったんこわら尼御前を訪ねさせてから会わせることをあらかじめ申告しておき、こわら尼御前を暗証的に機能させることである。この手法を用いれば、たとえ詐欺師がいや五郎とさいくわんの間の替銭の存在を知って、偽の替銭文書を作成したとしても、事情を知らぬ詐欺師、あるいは詐欺師から替銭文書を購入した者は、直接いや五郎に持込んでしまうために、不正は直ちに露見するこ

とになる。もっとも、追記にはこわら尼御前を訪ねるように指示しているので、この替銭文書を盗んだ者が文言通りにこわら尼御前を訪ねてしまったら、暗証的機能は作動しないけれど、そういう盗難への対策としては、追記部分は別に作成しておけばよい。史料上は、写しは一紙に書き写されているが、実際には、持参者宛の指図文言は、いや五郎宛の本文とは別の紙に書かれていた可能性が高く、その方がより安全である。たとえ、すべてを一紙に書く手法をとったとしても、少なくとも偽造防止には有効である。

この仮説は、先の第2から第4までの問題に関しても合理的説明を与える<sup>20)</sup>。第2の持参人と払出人との信頼関係の欠如はこわら尼御前により補完され、第3の割印を使用する割符である可能性を排除してこわら尼御前を利用する原初的替銭であることを再確認させ、第4の割符の選択の方が有効であるとする推定を退けるのである。つまり、さいくわんは、普通の原初的替銭ではいや五郎から払出を受けることができない者－いや五郎との面識がない者－にも払出を可能にする替銭の取組を行うために、こわら尼御前を介在させる手法を採用したのである。

さて、この第4の問題、すなわちこの時期に割符は既に登場しているのに、なぜさいくわんが、なおもこの手法を用いて原初的替銭を利用するのかという理由については、さらに吟味しておく必要がある。割符を利用しても、いや五郎の見知らぬ使者への払出は可能だったはずである。

その理由として考えられるとすれば、1つ目には、さいくわんは、この時、片方文書を直ちにいや五郎へ送付してくれる商人が見つからなかったという可能性である。「急ぎ急ぎ」払出して欲しいという領家の意向がある以上、片方文書が別経路で送達される時間も考慮しなければならない割符の利用は（図2）、不適だったのである。

2つ目には、割符とは別に、原初的替銭の限界－見知らぬ持参人への払出が困難だという点－を克服すべき手法が、あえて模索され試行されていたという可能性もある。

3 つ目には、単純に、さいくわんが、割符を知らなかった可能性も残る。ただし、割符を知っていたとしても、さいくわんは、なお原初的替銭の有効性－払出上の簡便性－を重視して、1 つ目と 2 つ目の理由から、原初的替銭のしくみの利用を選択しうるのである。

## お わ り に

本稿では、さいくわん文書を題材に、そこに登場する人物の替銭における役割を確定した。史料解釈上、この文書は形式的には、委託文書であるという見通しは立つものの、第 1 に、こわら尼御前の存在の意味、第 2 に、持参人と払出人の間に面識がない中でなお原初的替銭が選択されている理由、第 3 に、文書自体が実は割符である可能性の有無、第 4 に、さいくわんが割符を利用しない理由という未解決の問題が残っていた。

しかし、こわら尼御前が暗証的機能をもつという仮説は、その 4 つの問題を、同時にしかも合理的に説明する。持参人と払出人の間に面識がない場合には払出ができないという原初的替銭の限界性は、14 世紀初頭に割符によって克服されたのであるが、同時期、それとは別に、原初的替銭においても、暗証的機能の導入によって、その解決策が模索されていたのである。

## 注

- 1) 国立国会図書館では、冑山文庫旧蔵古文書の『田券』のうち元亨 3 年 6 月 18 日「替銭証文」（請求記号 WA25-68）として整理されている。本稿での文書名は、竹内理三編『鎌倉遺文』古文書編、補遺第 4 巻、東京堂出版、1971-1997 年、133 頁、補 2027 号の文書名による。
- 2) 庄原市史編集委員会編『庄原市の歴史』通史編、庄原市、2005 年、355-356 頁、また同資料編、2004 年、88-89 頁に、この替銭における文書中の人物の役割等の説明があるが、しくみ全体の説明はなされていない。
- 3) 替銭研究に関する先行研究のうち、替銭の効果と割符の特質に関する本稿の記述については、拙稿「割符のしくみとその革新性－割符の割印を手がかりにして－」『史学雑誌』第 120 編第 8 号、2011 年 8 月、また「預り文言の割符の発生過程に関する試論」『松山大学

論集』第25巻第4号, 2013年10月で整理したので, それらに依拠する。

- 4) 割符には預り文言の割符と為替文言の割符との2種類がある。
- 5) 田中稔『中世史料論考』吉川弘文館, 1993年, 233-241頁。
- 6) 桜井英治「中世の貨幣・信用」桜井英治他1編『流通経済史』山川出版社, 2002年8月, 60頁。
- 7) 拙稿「経済史より見た高松城成立の背景」市村高男他3編『中世港町論の射程』(港町の原像: 下) 岩田書院, 2016年9月, 266-271頁。
- 8) 旧稿では, 割符との間で割印が施される文書を「もう一つの文書」と表現したが, その後, 「さいふの方〜やりて候」(若狭国太良荘史料集成編纂委員会編『若狭国太良荘史料集成』第4巻, 小浜市・小浜市教育委員会文化生涯学習課, 2004年, 5-6頁, 第9号) という表現が確認できたので, 「片方文書」とする。
- 9) ただし, しくみの上で考えれば, 割印の合致は持参人の正当性を保証するものではないし, 払出人に払出を強制するものでもない。振出日や持参日が不自然だと疑われれば, 払出が拒否されることもあったはずである。

なお, 本稿での割符の説明は, 基本的に, 2種類の割符のうちの為替文言の割符に関するものであり, 預り文言の割符のしくみはこれと少し異なる。預り文言のしくみは, 先に乙地で払出人のBがAから現銭を預かった際に, Aに預り証を手渡し, その預り証をAが甲地に持込み, Eに譲渡することによって甲地での資金をAが獲得する一方, Eは入手した預り証を乙地のFに送付し, Fがそれを払出人Bのところに持参して, 払出がなされるというもので(図3), これにより, 2方向の送金がなされる(拙稿「割符のしくみ」50-51頁)。為替文言の割符と預り文言の割符では, 2方向の送金を可能にするという効果に関しては同じであるのだが, その2種類の文書では形式が全く異なっているにもかかわらず, いずれも割符と呼ばれる理由については, 拙稿「預り文言の割符」にて仮説を提示した(18-25頁)。

- 10) これについては, 別稿を準備しており, そこで詳しく述べる予定である。
- 11) 中田薫『法制史論集』第3巻上, 岩波書店, 1943年, 172-247頁。中田氏は, 近世の為替手形を「支払委託文言の為替手形」(173頁)と「支払約束文言の為替手形」(191頁)とし, 室町時代の為替手形に相当するものを割符と見て(209頁), 「支払委託文言の割符」と「支払約束文言の割符」とが並び行われたと表現しているが(225頁), 本稿では表記の簡潔化のために「委託文書」と「約束文書」とした。
- 12) 中田『法制史』225頁。
- 13) 竹内『鎌倉遺文』第24巻, 84頁, 18418号。
- 14) 拙稿「経済史より見た」268-269頁。
- 15) かつて, 井原今朝男氏は, 信濃国伴野荘の関係史料により他地での振出人自身による払出を約した文書の存在を推定し, 日本中世の為替が借用証文・債務証書の中から発展したと考えた(『日本中世債務史の研究』東京大学出版会, 2011年, 171-176頁)。しかし, 井

原氏が、建武2年（1335）11月7日付けの信濃国での浄阿の受領書を、同月16日に京都で浄阿本人が支払うものであると解釈したのには無理があり、よって、この史料を根拠にして、他地払いの約束文書から替銭が成立したとすることができないことは旧稿で述べた（拙稿「預り文言の割符」12-16頁）。しかし、井原説は多くの研究者に対してなお影響を及ぼしており、本稿が、約束手形の可能性についてかなり細かく議論せざるを得ないのは、中世の替銭文書を委託文書ではなく約束文書として解釈する傾向が学界では今も一般的と思われるからである。

- 16) 中田『法制史』193-196頁。
- 17) 竹内『鎌倉遺文』補遺第4巻、133頁、補2027号。なお、この史料の読み方については、前掲の庄原市史編『庄原市の歴史』資料編、88頁他、広島県編『広島県史』古代中世資料編Ⅴ、広島県、1980年、565頁、石井進編『長福寺文書の研究』山川出版社、1992年、148頁を参照した。
- 18) 服部英雄「質入担保となった備後国地毗荘」『日本歴史』第438号、1984年11月、20-39頁。本稿における河北領主と長福寺に関する記述は、すべて服部論文に依拠する。
- 19) 別人による払出を予定した約束文書と解釈する場合として、こわら尼御前は受付のみで、宿には別の払出人が存在するという可能性についても考えておくと、その場合、この替銭文書には追記も含めて払出人の記載が全くないことになる。つまり、その替銭とはこれでは見知らぬ宿まで行って名前のわからぬ人から払出を受ける契約であり、それでは替銭は成立しない。よって、別の払出人が存在した可能性はない。
- 20) さいくわん文書をさいくわん自身の払出したした場合にも、こわら尼御前の役割に暗証的機能を持つと見て解釈が可能になるか否かに関しては、そもそも、さいくわん自身の払出という解釈が文言上成立しない以上、考慮する必要がない。

（本稿は、平成27年度に交付を受けた松山大学特別研究助成による成果研究の一部である。）